帰ってきた浦島太郎

アンジェロ・イシ

サッカーW杯開催の効果で、今年はブラジルがメディアに頻繁に登場している。先入観やステレオタイプの再生産に過ぎない記事や番組も少なくないが、六月初めに放送されたNHK-FMラジオのブラジル特集番組はこれらとは一線を画していた。ありきたりのサンバやボサノバではなく、滅多に聴けない様々なジャンルのブラジル音楽が紹介された。

中でも懐かしく堪能できたのが、七〇～八〇年代にブラジルのテレビで流れた日本往復便のCMソングである。探せばインターネットの動画サイトでも視聴は可能だが、ノスタルジーに浸るにはなんだか物足りない。今回は私も解説者としてスタジオでの番組収録に参加できたおかげで、LPレコードで再生されたこの曲に直接触れるという幸運に恵まれた。

CMはポルトガル語と日本語で流されていたが、曲のモチーフはかの有名な浦島太郎のお伽話だ。日本語版の歌詞を一部要約すると「昔々、浦島は助けた亀に連れられてブラジルにやって来た。居心地の良さに故国を忘れて住み着いたが、故国が恋しくなって別れを告げると、プレゼントされた玉手箱には日本までの往復切符が入っていた」といった内容である。

歌っているのはローザ・ミヤケ。ブラジルの日系移民社会では誰もがその名と声を一度は聞いたことがあるタレントだ。彼女が司会を務めたテレビ番組「イマージェンス・ド・ジャポン」は日系人以外の視聴者も多かったので、ブラジルの日本ファンを増やす上での貢献は計り知れないが、番組の看板企画であった「Uta no Champion」というのど自慢コンテストは思わぬ形で日本に「輸出」された。私は南米から日本への「デカセギ移民現象」を研究するために一九九〇年に来日して以来、在日ブラジル人社会を追跡してきたが、今やブラジルタウンとして名高い群馬県大泉町でブラジル人による最初の「全国のど自慢」に出合い驚愕した。イベントの形も、副賞として贈られる新車や日伯往復航空券も、あの「歌のチャンピオン」そのものであった！

この見事な再現を目の当たりにし、デカセギ現象はブラジルの日系移民文化を「空洞化」させたのではなく、日本に「空動化」させたのだと確信した。そしてその人と文化の大移動を可能にしたのは、まさにあのCMで歌われている長距離フライトだ。その恩恵を受けて、生き心地の良さに故国を忘れかけた私も、日伯の往復切符を多用し、浦島太郎にならずに日本に住み着いている。

プロフィール
1967年サンパウロ市生まれ。武蔵大学社会学部教授。サンパウロ大学ジャーナリズム学科卒業。90年に来日、新潟大学大学院および東京大学大学院を経て、ポルトガル語新聞の編集長を務めた。日伯の移民やメディアの研究をしながら、日本各地で国際交流や共生をテーマに講演をおこなう。2010年より現職。著書に『ブラジルを知るための56章』（明石書店）など。

月刊 みんぱく 8月号目次

1 エッセイ 千字文
帰ってきた浦島太郎
アンジェロ・イシ

2 特集
多みんぞくニホン

2 特別展「多みんぞくニホン」から10年
庄司 博史

4 朝鮮学校の今
――コリアンコミュニティとともに 藤井 幸之助

5 苦学して夢をかなえるネパール人 南 真木人

6 中華学校の子どもたちにみるニホン 陳 天璽

7 ベトナム寺の建立
――ベトナム人コミュニティの現在 野上 恵美

8 ブラジル人の足あと 拝野 寿美子

9 新大久保・イスラーム横丁の今 菅瀬 晶子

10 集めてみました世界の○○
水筒編 久保 正敏

12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら
伝統は単数か複数か？――モンゴル馬頭琴伝統音楽
上村 明

16 多文化をあきなう
小さな町の大きな挑戦
――“穏豊社会”への一里塚
神田 浩史

18 味の根っこ
ホットク
髙 正子

20 人間学のキーワード
ガバナンス
出口 正之

21 異聞逸聞
変容するボリビアの日本人学校
吉富 志津代

22 制服の世界、世界の制服
空の企業文化
八巻 惠子

24 次号予告・編集後記